

# 並木麻衣さん

(日本国際ボランティアセンター・スタッフ)

## イスラエルには本当の勇気を求めたい

二三年十月七日に始まったパレスチナ・イスラエル戦争は停戦に至っていない(十二月六日現在)。ハマスの先制を非難する声がある一方、そこに至った原因、経緯を追及する声は大きくない。日本国際ボランティアセンターのスタッフで、現地事情に通じた並木麻衣さんに聞いた(聞き手 榎田秀樹さん。取材日は十一月一日)。

### ハマスの対応を誤った国際社会の罪

——並木さんはパレスチナとの関わりが長く深いのですが、関わるにいたったきっかけはなんだったのでしょうか。

二〇〇四年に一浪して東京外国語大学のアラビア語科に入学したのですが、二年生後半にパレスチナ・ゼミで学ぶことを決めました。そして、三年生になる前の〇六年の春休みに、パレスチナとイスラエルを見ておこうとバックパッカー旅行に出かけたんです。

——最初のパレスチナの印象は？

行く前は、パレスチナもイスラエルも怖い場所だと思っていました。でも、ヨルダンからバスでパレスチナ自治区である西岸地区のジェリコという町に入ると拍子抜けしました。

町を歩くと、ゆつたりと水たばこをのむ人はいるし、お茶を飲んで語らう姿もある。私に「家に来ない？」とナンパする男の子もいたし、ああ、ここは普通の人間が住んでいる普通の町なんだと実感したんですね。その旅行で、西岸地区には、エリート大学であるビルZeit大学があり、留学生を募集しているという情報に接しました。ふと暮らそうか……と思っちゃったんです。

——実際に留学されたのですか？

はい、その年の八月に。日本人は私だけ。大学ではアラビア語とその口語、そしてパレスチナ問題の政治学を十カ月間学び、その後、東エルサレムにあるイスラエルの大学であるヘブライ大学にも行き、三カ月間ヘブライ語を学びました。

——留学で得た収穫は何だったのでしょうか。

パレスチナは一枚岩と思われがちですが、じつは、現地には多様な考えがあると知りました。例えば、パレスチナ自治区を認めた一九九三年のオスロ合意は、国際社会からは成功と言われたけど、パレスチナ内部では失敗と受け止められています。事実、現地では、汚職もあればコネ社会でもあることで、自治政府への不満もある。だからこそ、一人ひとりに推しの政党があるんです。それを家族の中でも議論するし、子どもですら自由に話していました。

また、さまざまな努力が詰まった地域であるとも知りました。

現地にはじつにたくさんNPOがあります。どこ

